

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 15 日現在

機関番号：13101
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21720007
 研究課題名（和文）ジャック・デリダの思想における「テレコミュニケーション民主主義」の構築とその展開
 研究課題名（英文）The Construction and Development of "Telecommunication Democracy" in Jacques Derrida
 研究代表者
 宮崎 裕助（MIYAZAKI YUSUKE）
 新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
 研究者番号：40509444

研究成果の概要（和文）：
 本研究は、当該研究者がこれまで独自に練り上げてきたテレコミュニケーション概念の視点から、その民主主義論の討議倫理的な可能性を解明し、デリダの民主主義概念の系譜学の意義を提示することができた。

研究成果の概要（英文）：
 This research revealed the possibility (as discourse ethics) of Derrida's theory of democracy in terms of our own concept of "telecommunication", and exhibited the significance of Derrida's genealogy of the notion of democracy.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
2011 年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：デリダ、民主主義、コミュニケーション

1. 研究開始当初の背景

90 年代以降、冷戦体制崩壊後のグローバル化に伴って、世界の政治的・宗教的・民族的な諸紛糾の激化が進展するにつれ、デリダの思想は、「倫理 政治的転回」と言われる特徴を帯びるようになる。そこで浮上した主要なテーマこそ、民主主義である。デリダによれば、民主主義は、現実不完全な制度であるだけでなく、理論上も厳密には「不可能なもの」である。にもかかわらず、デリダは、それが不可能であるかぎり、むしろ現代社会に不可欠な理念（「来たるべきデモクラシー」と呼ばれる）となりうることを強調し、民主主義の未来を積極的に模索しようとした。他方、現代の民主

主義論は、社会・政治哲学のシーン全体で非常に盛んになっており、熟議的民主主義（ハーバーマス）や、対話型民主主義（ギデンズ）、共同体論的民主主義（テイラー）、リベラル民主主義（ローティ）、ラディカル民主主義や闘技民主主義（ムフ、コノリー）、ディセンサス民主主義（ランシエール）など、さまざまなかたちで追究されている。それゆえ、本研究ではデリダの「来たるべきデモクラシー」の概念はその錯綜した状況下でいかに寄与しうるのかの解明を試みた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現代フランスの哲学者ジ

ヤック・デリダが 90 年代以降に提唱した「来たるべきデモクラシー」の概念の検討を通じて、現代民主主義論の新機軸を打ち立てることである。デリダはこのデモクラシー概念を、古代ギリシアから現代にいたる「友愛」のモチーフの系譜学的探究のなかで浮き彫りにしようとしていたが、『友愛のポリティクス』(1994 年)十分に練り上げることなく 2004 年にこの世を去った。しかしこの「来たるべきデモクラシー」は、着想と射程の遠大さから、デリダの死後も、毀誉褒貶にさらされながら、欧米を中心とした倫理学・社会哲学・政治学の文脈で注目を集めてきた。本研究は、応募者がこれまで取り組んできたデリダの討議理論研究の成果を基盤とすることにより、そのデモクラシー概念を「テレコミュニケーション民主主義」という独自の政治哲学的概念へと結晶させ、ますます複雑化し混迷を深めている民主主義論の現状に新たな展望を切り開くことを目指す。

3. 研究の方法

本研究は「民主主義」という大きな主題を扱うにあたって、三つの段階を踏むことにより達成される。第一に、デリダによる「民主主義」の用法の確定。第二に、デリダの民主主義概念が位置づけられる「友愛」の系譜学の把握とその一般的な拡張。これにより「来たるべきデモクラシー」の系譜学を描き出す。第三に、こうして把握された民主主義概念の歴史的射程が、いかなるアクチュアリティをもち、未来の可能性に開かれているのかを追究する。これは、テレコミュニケーション概念を軸とした新たな民主主義概念の構築と展開として実行に移される。

4. 研究成果

本研究の研究成果は、以下の二つの視点から、以下の二つの視点()から、デリダにおける民主主義論の基底をなす論点を解明し、また、さらに三つの点()において、その民主主義論の展開をなす論点を解明した点にある。

一つ目は、議会制民主主義について。カール・シュミットは、ヴァイマル共和国において「永遠の討議」に明け暮れる議会制民主主義の無力を説き、主権者による決断主義の重要性を説いたが、本研究は、決断の思想とも要約されるデリダの政治哲学が、シュミットの決断主義への批判を通して、議会制民主主義に対していかなるスタンスをとりうるのだろうかを検討した。その成果は英語で公刊された。

二つ目は、「ならず者」について。「ならず者」とは、9・11以降、ブッシュ政権

下のアメリカ合衆国が、国際法を尊重しない「テロ支援国家」を指して用いた言葉だが、デリダ晩年の主著『ならず者たち』のテーゼは、ならず者を名指して軍事攻撃を仕掛けるアメリカのように、国家のテロルは少数の特定の国家ではなく、世界中に遍在し、ならず者はいまや至るところに存在する、というものであった。この事態は、民主主義にとっていかなる帰結をもたらすのだろうか。サミュエル・ウェーバーによるデリダの「ならず者」論(2008)を翻訳紹介することを通じて、訳者解題として、そのような問いに答える論点を明らかにした。

三つ目として、「敵」について。かつてカール・シュミットは、「敵」の認定と殲滅こそ政治的なものの概念と国家主権の本質が存在しているとした。こうした「人類の敵」の認定とは、まさに国家主権が主権たりうるために必要としている行為ではないだろうか。そうした観点から、「敵」の具体的形象が「海賊」として出現してくる現代的事象を検討し、民主主義政治の構造的臨界点を解明した。

四つ目として、「自己免疫」について。「自己免疫」は、デリダが民主主義が孕む自殺的論理を解明すべく名づけた生政治的形象である。民主主義の構造を駆動しているのは、それ自体として矛盾を抱えている民主主義の自己を維持するためにこそ、非自己への攻撃を自己自身に振り向けることで当の防御を解除し、かくして他者からの攻撃にみずから曝されなければならないとする自殺的論理にほかならない。学会発表では、現代の民主主義の構造的限界をこのようなデリダの企てから出発して問題化することができた。

最後に、友愛の感情について。このような民主主義の難問にどう答えるのかについて、友愛の感情に目をむけることにより、「情感的なもの」(=美学)の探究の帰結として、友愛の哲学史が示していた、この政治的情動の可能性を再発見するに至った。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

1) 宮崎裕助、星野太「海賊たちの永遠戦争
ダニエル・ヘラー=ローゼン『万人の敵』
に寄せて」、『現代思想』第39巻第10号(2011
年7月)青土社、128-136頁。査読無(依頼
原稿)

2) Yusuke Miyazaki, "Responsibility of
Making Decisions without Decisionism:

From Carl Schmitt to Jacques Derrida, " *Glauben und Wissen in der Geistesgeschichte*, ed. Kurihara Takashi (Niigata: Graduate School of Modern Society and Culture, Niigata University, 2011), pp. 140-155. 査読有。

3) 宮崎裕助「革命の印璽から残ったもの
ジャン・ジュネ『恋する虜』の余白に」
『ユリイカ』第43巻第1号(2011年1月)
青土社、190-199頁。

4) 宮崎裕助「脱構築はいかにして生政治を
開始するか デリダの動物論における「理
論的退行」について」『現代思想』第37巻第
8号(2009年7月)青土社、142-155頁。査
読無(依頼原稿)。

〔学会発表〕(計3件)

1) 宮崎裕助「自己免疫的民主主義とはなにか
デリダ『ならず者たち』を読む」第77
回 哲学/倫理学セミナー2011年11月19
日文京区アカデミー向丘

2) 宮崎裕助「海賊パラダイムの時代」UTCP
ワークショップ「海賊と国際秩序」2011年
8月2日東京大学駒場キャンパス

3) 宮崎裕助「民主主義の不可視なる敵 デ
リダにおける自己免疫の政治」表象文化論
学会第6回大会、2011年7月3日、京都大
学総合人間学棟

〔翻訳〕(計2件)

1) ダニエル・ヘラー＝ローゼン「万人の敵
海賊と万民法」宮崎裕助・星野太訳、『現
代思想』第39巻第10号(2011年7月)青土
社、106-127頁。

2) サミュエル・ウェーバー「ならず者民主
主義」河野年宏・宮崎裕助訳、『みすず』583
号(2010年6月)みすず書房、18-34頁、同
584号(2010年7月)6-22頁。

〔図書〕(計1件)

日本カント協会編『カントと日本の哲学』、
理想社、2011年、共著

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宮崎 裕助 (MIYAZAKI YUSUKE)
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：40509444